

「嘉納治五郎とオリンピック」

大阪高体連柔道専門部
部長 小寺 建仁

本年度は第 33 回オリンピック競技大会がフランス・パリを中心に 7 月 26 日から 8 月 11 日まで開催されます。パリでオリンピックが開催されるのは 1900 年、1924 年に続き 3 回目となります。本大会では、32 競技 329 種目が実施され、開会式ではパリ中心部を流れるセーヌ川が舞台となります。

3 年前に開催された東京 2020 大会（世界的なコロナ禍の影響で 1 年延期となり開催年は 2021 年）における世界各国から参加された選手たちの世界最高峰のパフォーマンスに感動し、興奮を覚えたことは、まだ皆さんの脳裏には鮮明に残っていることかと思えます。特に、柔道競技においては、アテネ 2004 の 8 個を上回る 9 個の金メダルを獲得し、圧倒的な強さを見せつけ、私たち柔道関係者にとっては、自国開催という事とともに、大変誇らしく、夢と希望を与えてくれた大会であったことは間違いないと思えます。

ここで、オリンピックと柔道の創始者である嘉納治五郎との関係を少し触れてみたいと思います。日本がオリンピック・ムーブメントに関わるようになったのは、およそ 100 年前のことでした。それは、嘉納（1860～1938 年）が、1909 年に国際オリンピック委員会（IOC）委員に日本人として初めて就任してからの事です。当時の嘉納は、柔道のみならず、東京高等師範学校（現在の筑波大学）の校長も務め、水泳や長距離走、さらにはテニスやサッカーなど各種のスポーツを学生たちに行わせるほど、体育に熱心な教育者でありました。また、柔道や体育活動で得た道徳的な価値が、社会生活でも実践されるべきという考えを世界各国で広める活動を展開します。

その嘉納の思想を基にした活動が、世界中の多くの人々に共感され、1940 年の東京でのオリンピック開催を決定させたのです。しかしながら、嘉納が 1938 年 5 月に死去すると、その 2 ヶ月後に政府は、日中戦争の泥沼化により東京大会の返上を決定します。そして、それから 24 年後の 1964 年にアジアで最初のオリンピックとして東京開催が実現し、そして 2 回目の自国開催となる東京 2020 へと歴史は（開催は 2021 年）繋がっていきます。このような歴史を考えると、我々柔道に携わる者は柔道の創始者である嘉納治五郎の偉大さに畏敬の念を感じずにはられません。

最後に、今年度の本専門部の事業が安全に滞りなく実施されることを願い、本府における高校柔道の発展を祈念して巻頭のご挨拶といたします。